昭和五十七年度　大谷学会研究発表要旨

往相回向の行人

寺川俊昭

親鸞は『教行信証』「証巻」の臂頭に、周知のように次のように記す。

然るに煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乗正定聚の数に入る。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。

疑問の余地なく明らかなように、往相回向の心行を獲た凡夫は、現生に正定聚に住することが、大きな確信をもって語られている。この確信を、往相回向の心行即ち金剛心について、それが成就する人間像を「真の仏弟子」として彰わす中に、

真仏弟子というは、真の言は偽に対し、仮に対するなり。弟子とは、釈迦・諸仏の弟子なり。金剛心の行人なり。この信行によって、必ず大涅槃を超証すべきが故に、真の仏弟子という。

と記すのと併せ尋ねて、私は敢えて「往相回向の行人」という言葉を立てて、如来の回向に帰入して往相の一道を生きる人という了解を託し、真の仏弟子について親鸞が語る内容に呼応しつつ、この真の仏弟子なる人間像の積極性を明らかにしたと思う。

往相回向の心行と、親鸞はいう。その往相回向について、私は上述のような了解を基本的にもつのであるが、このような往相回向を実現する心行とは、親鸞が選択本願の行信と教学的に捉えたところの、一心帰命の信に外ならない。この行信が同時に、「即時入大乗正定聚之数」、即ち現生に正定聚の位につき定まるという利益をもたらすのである。一心帰命の信のこのような独自の仏教的意義を、親鸞が明確に自覚することできたその所依が、『大無量寿経』の「願成就の文」の教説にあることは、改めていうまでもない。

諸有衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと乃至一念せん。（本願信心成就の文）

至心に回向せしめたまえり。かの国に生ぜんと願ずれば、即ち往生を得て不退転に住せん。（本願欲生心成就の文）

本願信心成就の文の教説は、法然の選択本願念仏の教説との値遇によって得られ、「雑行を乗てて、本願に帰す」と表白された、回心と共に確立した親鸞における信仰的自覚の性格を、明確に自覚せしめたものと考えられるが、肝心のことは、この一心帰命の信の質が、「至心回向」即ち至心（真実心）に始まる如来の願心の回向成就であることが、読み取られたことである。それ故にこの「至心回向」に始まる教言が、本願欲生心成就の文と了解されたのは、極めて自然である。欲生心の願心は、親鸞の了解によれば回向心に外ならないのであるから、即得往生住不退転を内実とする願生心こそ、如来の回向心の成就そのものであって、「回向為首、得成就大悲心」といわれるまさにその大悲心の行証されていく相に外ならぬと、了解することができるであろう。

このように、一心帰命の信の根拠となり、その質を規定する至心回向について、親鸞は次のような有名な解釈を行った。

至心は、真実という言葉なり。真実は、阿弥陀如来の御心な

り。

回向は、本願の名号をもって、十方の衆生に与えたまう御法なり。

ここで親鸞は、「回向の法」という極めて独自の了解を明示している。回向の法という概念を、私はそこにおいて如来の回向を自証する事実と理解して使用するのであるが、この回向の法とは勿論、本願の名号の施与という事実に外ならない。本願の名号の施与とは、信念の表白として敢ていえば、「本願の名号、われらにあり」と表白されるようなそれであるから、その現実態は取りも直さず、衆生における一心帰命の信の現前に外ならないであろう。この信の自覚的表白は、『願生偈』がいみじくも表白したように、「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来願生安楽国」に、その最も的確な表現をみることができよう。この表白について、私はそこに「称無碍光如来名」という意味深い事柄がその契機としてあることに、十分の注意をしたいのであるが、ここにこの一心帰命の信が、選択本願の行信として理解される根拠があるというべきことを思う。このような回向の法である本願の名号への帰入によって確立する、往生浄土の相をもった生への転成、これが往相回向という言葉をもって語られる、本願の仏道における宗教的生の事実だと了解する。敷衍すれば、本願の名号への帰入とは、衆生における選択本願の行信の確立に外ならず、この時無始以来流転の相をもってあった生、即ち三有虚妄の生は翻され転ぜられて、曇鸞のいわゆる本願無生の生、即ち乗彼願力と自覚される往生浄土の相をもって生きられる生が、実現するのである。

往相回向についての親鸞の了解をこのように尋ねつつ、その内実を更に推求していきたい。一体往還二種回向をもって浄土真宗を仏道として体系づけるところに、親鸞の独創があるが、回向を往相還相二種の相に開いて了解することは、偏に曇鸞の回向了解に依ることは、改めていうまでもない。その曇鸞の回向を語る文章に、親鸞は独自の訓点をつけて次のように読む。

回向に二種の相あり、一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功徳をもって一切衆生に回施して、作願して共に阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまえるなり。（「行巻」）

いかんが回向したまう、心に作願したまいき。苦悩の一切衆を捨てたまわざれば、回向を首として、大悲心を成就することを得たまえるがゆえに、功徳を施したまう。（『入出二門偈』）

回向の内実が功徳の回施と了解されていることは、いかにも独創的であるが、この回向の主体を如来に見い出したところに、親鸞の已証がある。そしてこの回向における功徳の内実を親鸞はいかにも見事に、次のように推求する。

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもって如来、一切苦悩の群生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもって、円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心をもって、諸有の一切煩悩・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。すなわちこれ、利他の真心を彰わす。かるがゆえに、疑蓋雑わることなし。この至心はすなわちこれ、至徳の尊号をその体

とせるなり。（「信巻」）

如来の至心なる願心即ち真実心の推求として展開するこの思索は、至徳の尊号たる本願の名号に帰入した端的の自証の内容を開顕したものに外ならない。衆生の穢悪汚染性、虚仮不実性を鋭くえぐり出しつつ、換言すれば回心懺悔せしめつつ、それを転ずる円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳、即ち真実功徳が、本願の名号への帰入において、そこに現行する。これが即ち、功徳の回施に外ならず、しかもこの回施は、そこにおいて如来の回向を自証する回向の法である本願の名号へ帰入した端的である。このような至心即ち真実心が、「衆生を摂して畢竟浄に入らしむる」利他の真心と了解されるのも、いかにも自然であろう。

このような思索を踏まえて、親鸞はいう。

真実功徳ともうすは、名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。（『一念多念文意』）

往相回向がどのような生の事実をいうのかは、既に了解した通りであるが、この推求を踏まえて、私は親鸞が了解した往相回向について、ほぼ次のようにいって誤りはないと思う。即ち、本願の名号において無上大涅槃の功徳である真実功徳が衆生に施与せられるのであるが、この真実功徳のはたらきが根拠となって、流転する衆生の生が転ぜられていく。ところが、この真実功徳＝清浄功徳は安楽浄土の功徳の総相に外ならないことは、『論』『論註』の明かす通りである。従って、真実功徳を根拠として転成した生は、安楽浄土を開示された生であり、その意味で往生浄土する生といわるべき相をもったものであることも、自ら明らかなのではなかろうか。更にこのような転成した生が、真実功徳を根拠としているものであるからこそ、必至滅度する生、即ち現生に正定聚につき定まった生であることも、自らに明白になると思う。ここに往相回向はその内実を得るのであるが、同時に私は、親鸞が本願の名号をもって、浄土真実の行、即ち流転して止まぬ衆生に浄土＝真実報土として、真実功徳のはたらく世界を開示する行と了解したその独創性にも、いかにもとの共感とうなづきを、私は強くもつものである。

このような往相回向の心行を獲、その利益として大乗正定聚の機たらしめられた者、そこに実現する生の積極性は、冒頭に引いた「証巻」の文から明らかであるように、必至滅度する生、即ち「煩悩を具足しながら、無上大涅槃にいたる」一道に立ったところにあるといえよう。この機にはたらく功徳を「証巻」は周知のように、安楽浄土を成就する二十九種功徳の中から、次の五種の功徳を選んで語っている。即ち妙声功徳、主功徳、眷族功徳、大義門功徳及び清浄功徳である。この五種の功徳をもって親鸞が語ろうとする要点は、正定聚に入らしめられた者が、主功徳に支えられて「三界雑生の火中」即ちこの穢土の只中に、同一念仏の一道において「四海の内皆兄弟とする」眷族功徳を証しし、それによって大乗一味の徳を実現しようとするところにあるのではなかろうか。これをもって、清浄功徳を内容づけたのである。このような浄土の功徳を行証しようとするところに、真の仏弟子とされた往相回向の行人の、主体的に生きようとする生、即ち願生道の内実があるというべきではなかろうか。